



I はじめに

報告資料集(58 ページ)に基づき、本分科会で議論すべき「5つの柱」が読み上げられた。

1. **差別の現実と教育内容:**
子どもを取り巻く差別の現実を明らかにし、人権課題を自分事として捉え、差別をなくす教育内容をどう創造するか。
2. **反差別の仲間づくり:**
全ての子どもが共に育つための、差別を許さない集団(仲間)づくりをどう進めるか。
3. **教職員の変容:**
実践を通じて保育者・教育者自身が何を学び、どう変わり、それが子どもにどう影響したか。
4. **教育条件の向上:**
同和教育を軸とした人権教育を進めるための、教育環境や条件の整備。
5. **連携:**
学校・家庭・地域・関係機関がどう連携し、子どもの自立や変革につなげているか。

これらを確認した上で、「子どもたちの事実(姿)を出発点にする」という全体のスローガンを意識して報告を聞くよう促された。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—⑳

「自分は大切だ」と思える学校づくり

(徳島県人教)

—主な質疑と意見—

大阪 生徒に「安心感」を与えるために、先生方が具体的にどのような声かけや仕掛けをされているのか。

報告者 「縦のつながり(先輩・後輩)」を重視している。全校生徒で行事を行うため、4年生(最上級生)が自然と下級生を世話し、声をかける文化がある。教員も学習面で自信を持たせるよう、個別のペースに合わせて「できていること」を認める声かけを徹底している。

長崎 生徒同士の横のつながりや、家庭の課題(経済面や親の理解)にはどうアプローチしているか。

報告者 「全校がワンチーム」という意識で、学年を超えた斜めの関係で横のつながりを補っている。家庭環境への介入は難しい部分もあるが、スクー

ルソーシャルワーカー等と連携しつつ、まずは「学校に来れば安心できる」という居場所の保証に全力を注いでいる。

—報告2—㉑

ハンセン病療養者の短歌を読む(石川県人教)

—主な質疑と意見—

福岡 ハンセン病という理不尽な問題に対し、教員が「許せない」という思いを語ることも大切だと思うが、なぜあえて主観を排したのか。

報告者 事実があまりに重いため、教員が先に感情を出してしまうと、生徒が引いたり「先生に合わせて感想を書く」だけになったりする恐れがあったから。「事実」と「当事者の言葉(短歌)」のみを提示することで、生徒自身の内側から怒りや悲しみが湧き上がるのを待った。生徒は「差別される側」の視点に立ち、怒りや悲しみを共有できたと感じている。

鳥取 なぜ「短歌」を教材にしたのか。

報告者 31文字という短さの中に、強烈な「叫び」や「情景」が凝縮されているから。長い文章が苦手な生徒でも情景をイメージしやすく、心にストレートに響くと考えた。実際にユニークな短歌や切実な短歌が多く、生徒の感性に訴える力が強かった。

—報告3—㉒

「A、Bの関わりと成長

～子どもたちの姿を見て～(三重県人教)

—主な質疑と意見—

福岡 コース別学習の決定方法は?

報告者 基本は子どもの希望選択制(5つのコースから選択)。ただし、今回の報告の中心である子どもAに関しては、彼が「友だちのCと一緒に学びたい、Cに分かってほしい」という強い願いを持っていた。最初、Cは別のコースを希望していたが、Aが「俺はこのコースで自分のことを考えたい。お前にも来てほしい」と一生懸命思いを伝え、最終的にCも納得して同じコースを選んだ。

教員としては、Aの「伝えたい」という思いを支え、背中を押すような関わりをした。無理やり割り振ったのではなく、子ども同士の関係性の中で決まっていた。

兵庫 先生自身がA、Bと関わる中でどう変わったか。

報告者 以前は自分自身の部落出身という立場を子どもに話すきっかけを作れていなかった。今回、子どもたちが勇気を出して語る姿を見て、自分も一人の人間として、先輩として、「先生も実はな…」自分の思いを語るようになった。

—報告4—㉓

「本当の気持ちを伝え合う友だちを作りたい～子どもによさを信じて～」(大阪府人連)

—主な質疑と意見—

鳥取 子どもたちがそこまで自分をさらけ出せるようになるために、先生(報告者)や学年団の先生

方は、普段からどのような働きかけや声かけをされているか。

報告者 一番大事にしているのは、子どもたちに「本音を出せ」と言う前に、まず私たち教員自身が「本音」を出す、自分をさらけ出すこと。教員が完璧な存在ではなく、悩みも弱さもある一人の人間だということを、子どもに見せていく。大人が本音を見せることで、子どもたちは「ここは自分の弱い部分を出しても大丈夫な場所なんだ」「かっこつけなくてもいいんだ」と感じてくれる。そうした「安心してできる空気」を、教員集団全体で作っていくことが、子どもが本音を語るための土台になっている。

所属不明 子どもたちが自分のルーツや家庭のことなど、非常にデリケートな内容を語っているが、話す内容の範囲や、情報管理について、どのような配慮をしているのか。

報告者 その点には細心の注意を払っている。大前提として、「何をどこまで話すか」は、全て子ども本人の意思に委ねている。自分自身が「ここまでなら伝えたい」と決めた範囲で語っている。事前に、クラス全体で「ここで話されたことは、絶対にこの場の外に持ち出さない」「人の弱みにつけ込むようなことは絶対に許さない」というルール(守秘義務)を徹底的に確認する。これは単なるルールではなく、「仲間として互いを守る」という集団づくりの一環として。

語る前には、子どもと何度も話し合い、「本当に話しても大丈夫か」「もし傷つくことがあったら、先生が全力で守るから」ということを伝える。教員が「安全基地」になることで、子どもは安心して一步を踏み出せる。この取組は、しっかりとした集団づくりができて初めて成立するものだと認識している。

—報告5—④

「一期一会～石川一雄さんの「灯」より～」(埼玉県人教)

—主な質疑と意見—

鳥取 具体的にどのようにして、関心の薄かった先生や、もしかしたら否定的な先生もいたかもしれない中で、理解と協力を得ていったのか。

報告者 最初から学年全体が同じ方向を向いていたわけではない。

最初は自分のクラスだけで実践した。その時の生徒たちの反応が、本当に劇的だった。授業後に涙を流しながら感想を書いてくる子、休み時間に「先生、もっと知りたい」と質問に来る子、差別に対して本気で怒りを露わにする子。まずは、その「子どもたちの姿」を、学年団の会議で共有した。

「私のクラスでこういう授業をやるので、もしよければ見に来てください」と、他の先生方に参観を呼びかけた。

1 クラスの成功体験を伝えることで、「自分のクラスでもできるかもしれない」と感じてくれる先生が増えていった。決してトップダウンで「やりなさい」

ではなく、「子どもが変わるよ」という事実を丁寧に伝え続けることで、徐々に協力の輪が広がっていった。

三重 狭山事件との出会いで先生ご自身が変わったという話が印象的だったが、その「強い思い」が、時として子どもへの「押し付け」になってしまう危険性はないのか。そのバランスをどのように意識されているか。

報告者 熱量はあくまで「きっかけ」、「なぜ『見えない手錠』と言ったのか?」「自分ならどうするか?」といった問いを投げかけ、子ども自身が考えるプロセスを重視している。共感できない子どもの意見も尊重する。「かわいそう」という感情論だけで終わらせず、「なぜ起きたのか」という社会構造へ目を向けさせ、最終的な判断は生徒一人ひとりに委ねている。

Ⅲ 総括討論

鳥取 埼玉の報告の中で「横のつながり(教員間の連携)」が大事だという話があったが、人権学習に対して温度差がある先生もいる中で、どのようにして学年団や他の先生を巻き込んでいったのか。また、大阪の報告には、子どもたちが本音を出すタウン・ワークス「My・Story」の取組において、教員側がどう関わっているのかお聞きしたい。

報告者(埼玉) 正直、最初は「寝た子を起すな(部落問題を教える必要はない)」という空気があった。しかし、私のクラスで実践した際、生徒たちが劇的に変わった。「差別はおかしい」と本気で怒り、涙する子どもの姿を他の教員に見てもらった。「子どもたちがこんなに熱く語っている。これを止める権利は我々にはない」という事実(子どもの姿)を共有することで、他の教員の意識も変わり、学年全体での取組へと広がっていった。

報告者(大阪) 子どもたちに「本音を出せ」と言う前に、まず教員である私たちが「弱さ」や「悩み」をさらけ出すことから始めた。「先生も実はこういうことで悩んでいるんだ」と語る大人の姿を見て、子どもたちは「ここは安心して話していい場所だ」と認識する。教員集団自身が、かっこつけずに本音で語り合える関係を作ることが先決だと考えている。

鳥取県 ハンセン病や部落問題など、重い課題を扱うと、子どもの中に「怖い」「関わりたくない」という忌避意識が生まれませんか。それをどう乗り越えて、「自分事」として捉えさせているのか。

報告者(石川) 確かに最初は怖がる生徒もいる。しかし「強制隔離」の話をしたとき、コロナ禍で自宅待機や隔離を経験した生徒たちが「理由もなく隔離される理不尽さ」を自分の体験と重ね合わせた。「昔の遠い話」ではなく「もし自分だったら」という想像力をかき立てることで、忌避意識は「許せない」という義憤に変わっていった。

報告者(埼玉) 私自身が、かつては部落問題を知らず、忌避意識を持っていた側の人間だった。しかし、当事者である石川一雄さんの「文字を奪われた

悔しさ」に触れ、心が震えた。「知らないことは罪ではないが、知ろうとしないことは罪だ」。教員自身はまず学び、感動し、震えること。その熱量が伝われば、子どもは必ず「自分事」として受け止める。

報告者(三重) 私の学校でも、子どもが差別的な言動をしてしまうことがあった。しかし、それは悪意というより「無知」であることが多い。石川県からのハンセン病問題の報告にあったように、まずは「正しい知識」を持つこと。そして、埼玉県からの報告のように、石川一雄さんのような「生身の人間(当事者)」に出会い、その生き様に触れることが、子どもたちの価値観を根本から変えるのだと改めて感じた。

奈良 私たちの地域でも、人権学習を進める中で「出会い」を大切にしている。本や映像だけでなく、実際に差別と闘ってきた地域の方々、お年寄りの話を聞く。その「語り」の重みが、子どもたちの心を耕しているのだと思う。大阪の実践にあった「地域のひとと語る会」も、まさにそういった「生きた教材」との出会いだと感じた。

報告者(大阪) 9年間(小中連携)のカリキュラムである。小学校では「自分を知る」「友だちを知る」ことから始め、中学校では「地域を知る」「社会を知る」へと広げる。中3では、自分の生い立ちや将来の夢、不安を語る「卒業論文(自分史)」のようなものを書く。これをクラスで発表し合うことで、互いの背景を理解し、差別を許さない強固な仲間関係を作り上げている。

IV 報告者感想

報告者(徳島) この2日間、報告を行い、また皆さんの話を聞く中で、自分が今勤めている場所でやるべきことが少し見えてきた気がする。

特に、不登校経験のある生徒との関わりについてだが、不登校という言葉がマイナスなイメージだけでなく、見つめ直してもいいのではないかと、新たな視点が生まれた。この会場で議論があったように、全国には人権教育に熱い思いを持つ人がたくさんいると実感でき、心強さを感じた。この経験を徳島に持ち帰って、またもっと勉強したいと思う。2日間、本当に感謝している。

報告者(石川) 報告者として十数年ぶりに参加させてもらった。全人教大会自体も数年ぶりだった。かつて自分が司会者として座っていた頃を思い出しながら、改めて参加したが、こんなにも目の前の子どものことに一生懸命になっている先生方がいるのだと目の当たりにし、来てよかったと心から思った。定時制高校には不登校の子がたくさんいる。明日からまた、そうした生徒たちとの関わりが待っている。この2日間でいただいた皆さんのエネルギーや元気を、明日からの実践に生かしていきたい。

報告者(三重) 2日間参加し、自分たちの学校としても、仲間づくりと「差別を自分事にしていく」ことはとても大切にしていることだと、改めて感じるこ

とができた。

自分自身、結婚差別にあった際、ここにいる大多数の人は直接受けることはないかもしれないが、その差別や事柄に出会ったとき、「誰の顔が浮かぶか」というところが、自分事にしていく最初の一步なのかなと思う。仲間づくりという点でも、今日自分の前に座っている(協力者の)先生方のような人たちが、自分のような教員を育てようと思ってくれたのではないかと思う。そうしたつながりを大切にしていきたい。

報告者(大阪) 子どもが本音を語る「My・Story」などの取組は、単なる思いつきではなく、ねらいを持って作文を書かせ、個別に会話する時間を設けるなど、丁寧な積み重ねの上にある。

子どもたちが伝えたい内容の中には、暮らしや家庭に関わる重いものもある。その場合は必要に応じて保護者とも相談し、当日の伝え方を一緒に考えることもある。そうやっていくことで、子どもたちが自分と向き合い、弱さをも見つめていくことができたのだと思う。これからも、子どもの思いを出発点に、仲間とつながれる集団づくりを進めていきたい。

報告者(埼玉) 石川一雄さんの生き方から学ぶ中で、私自身が差別に対する怒りや、理不尽さを許さないという思いを強く持った。それが生徒に伝わり、生徒自身の変化につながったのだと思う。

教員自身が学び、感性を磨き続けることが不可欠だ。一人ではできないことも、学年団や同僚を巻き込み、チームとして取り組むことで、学校全体の力に変えていける。今回の大会で討議したこと、交流した取組をもとに、私たちそれぞれが各地で実践を積み重ね、そして来年、埼玉を中心とした第77回大会にその実践を持ち寄り、また交流したい。

V 第9分散会 総括

○「知識」と「感情」のセット

歴史や法律などの「正しい知識」は不可欠だが、それだけでは行動に結びつかない。

短歌、手紙、当事者の語りなどを通じて、「悔しさ」「悲しみ」「怒り」といった感情(情動)に訴えかけることで、学習が「自分事」になる。

○教員の「自己開示」と「熱量」

子どもを変えるには、まず教員自身が変わる(学ぶ・感じる・語る)必要がある。

教員が「先生」という鎧を脱ぎ、一人の人間として弱さや本音を語ることで、子どもたちとの信頼関係(縦のつながり)が生まれる。

○「集団づくり」が差別の防波堤

いじめや差別を許さない空気は、管理や指導ではなく、子ども同士が本音で語り合える「横のつながり(仲間づくり)」から生まれる。

不登校や孤立を防ぐためにも、学校を「安心して失敗できる場所」「自分をさらけ出せる場所」にする必要がある。

○「事実」から出発する

抽象的な「人権」を語るのではなく、目の前の子ども
の姿、地域の現実、歴史的事実という「事実」を
出発点にすることが、ぶれない人権教育の核とな
る。